

「全員達成」目指して「率先垂範」「同僚支援」 生徒一人ひとりが学びの場を創る授業

「自分はこの程度」と自ら天井を設けていた生徒が、周囲との関わりを通して壁を突き破れるように。人が集い、お互いがお互いにプラスをもたらすような場を、生徒と共に創ろうとしている先生の実践をご紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／竹内弘真



物理
高原 隆先生

教師になろうと思ったきっかけは、小学生のときに「一緒に遊んでくれて、一緒に給食のおばさんに怒られるような先生」と出会えたこと。前任校では年中無休といつていいぐらい、部活動にもめりこんだ。瀬谷高校には9年在籍、2018年度に神奈川県立相模原中等教育学校に異動。

「熱心な初心者」に お客さんでいる生徒を

瀬谷高校は、学力的には神奈川県内で中堅校にあたる。同校の高原先生は、この学校の生徒たちの良さを肌で感じてきた。例えば班活動になじめずにいる生徒がいると、周囲は非難も無視もせずさりげなく輪に入れようとする。優しいのだ。気がかりな点もある。大学入試センターの調査発表を聞いたとき、高原先生は自分の懸念がその調査結果と一致していたのを知った。首都圏の公立高校10校を調査したところ、中堅校では、同級生の学ぶ姿に刺激されて生徒ががんばるといふ雰囲気は希薄で、家庭学習の習慣がない生徒も多い、というのだ。高原先生自身、生徒から吐露されたことがある。

「『飛びぬけた成果はいらない』というんです。努力して目立つことや、挑戦して失敗することをしたがらない。自立たず無難にやって『人並みプラスちょっと』の評価をもらえればいい、と」

だが、おとなしくしていれば評価されるのは「学校ローカル」。その態度を取り続けたら将来の選択肢は狭まる、と高原先生は危ぶむ。だから生徒に問いかける。「高校を出たあとで『どういう人と働きたいか、学びたいか』を考えたらどう？」

今のままの自分で選ばれると思う？」
では、周囲から一緒に働きたい、一緒に学びたい、と思われたいのはどんな人だろうか？ 知識やスキルをたくさん身に付けるのも手かもしれないが、短期間では急

成長しきれない人だっている。

だから高原先生がまず求めるのは「熱心な初心者」になることだ。今はまだできないことが多い初心者であっても、やってみたい、教えてほしい、と自ら学ぼうとする姿勢を打ち出していくこと。

「集団の中にそうした熱心な初心者がいると、授業でも部活動でも、個にとどまらず全体が伸びるんです。非常にチームの力になる。僕が最近思うのは、生徒たちは授業をお客さんとして受けている、ということなんです。そうじゃない。この学びの場は君たちが創るんだ。だからまずは授業を『一緒にやろうぜ』と言っています。お客さんになっている生徒を、『ミニミニの当事者にしたんです』

図1 プリント記載の今回の授業の学習目標・態度目標

【学習目標】

波に関する用語を理解し、使えるようになる

【態度目標】

学習目標の「全員達成」＝「一人も残さない」を目指す。

書き出す(考える)、説明する、質問する、聴く、話す、時間守る、ふり返る「ここがよくわからない。教えて」はチームの財産です。大切にしましょう。「ありがとう」の魔法を恥ずかしながらに実感してみましょう(体験する、が大切です)

【参考】

リーダーシップ最小三行動

○目標の設定・共有 ○率先垂範 ○同僚支援(環境整備)

**「率先しよう」「助け合おう」
「間違えていい」とくり返す**

学びの場を生徒たちに創ってもらおうべく、授業の態度目標に掲げているのが「全員達成」だ。学習目標を一人も残さず達成することを皆で目指す。そのためにやっほしいのが「率先垂範」「同僚支援」。高原先生はそのことを口頭でもプリントでもくり返し発信している(図1参照)。

3学期、2年3組の授業でのこと。プリント忘れがないか確認すると、女子生徒が前に出た。すかさず高原先生が言う。「ほら、この最初に出るのは、率先垂範。いいよ。忘れないほうがいいけどね」

今日学ぶのは「波」について。生徒たちはまず、予習して考えてくることになっていた波の具体例を書き出すことになった。その際に高原先生は小さなワークを導入した。A4用紙を3×3マスになるように折り目をつけ、そのうえで1マスごとに具体例を書くように求めたのだ。すん



用紙に3×3マスの折り目をつける作業。三つ折りをするわけだが、やり方がわからず手が止まる生徒や、4×4マスに折ってしまった生徒も。「教えて」の姿勢の出番だ。

なりできた生徒もいれば、折り方がわからず戸惑う生徒も。高原先生が促す。「わからなかったらどうする？ 辛かったら聞けよ。まわりも助けてやれよ」

具体例を何個書けたか、多い順に挙手してもらおうと、トップは7個書けた男子生徒だった。全員の拍手で称賛。高原先生は、別のクラスであがった例を紹介したあと、「ほかにもある？」とその生徒に尋ねた。彼は「津波」と回答。だが、津波は物理学の波の定義には当てはまらないので、高原先生がその点を補足した。男子生徒の顔がややこわばり、それを見て取った高原先生が続ける。

「おーい！ いいんだよ。非難しているわけじゃない。いつも言うけど、先頭切つて間違つてくれたほうがいいんだよ」

続いて、スポーツ観戦で見られるウェーブを皆でやってみて、波の性質を考える授業展開へ。高原先生がとうとうと語る。「これまでほかのクラスで、失敗をくり返してきたんだよ。最初のクラスでは二



学んだことを班でボードにまとめるワーク。「絵が得意な人は絵を描いてもいい」「書くのが苦手ならボードを取り回す役目もあるぞ」と高原先生はチームへの貢献を求める。

列14人にウェーブをやってもらったの。成功したと俺がいい気になっていたら「ウェーブをやった人はその様子を見学できていない」と突っ込みが入って。で、次のクラスでは全員が見学できるよう、二列ごとに3回やったら、今度は時間がかかるんだよ。どうしたらいい？」

ある生徒が、スマホでウェーブを撮影して動画で共有することを提案した。「ICT時代だね！ だけど俺、旧世代だからさ……。俺だって他の先生みたいにICT使いこなしたいよ？ でもそれができない、今の俺でもやれることは？」

全員でやるのは、という声。高原先生にもその腹案があったので、生徒にぐるりと輪になつてもらつて、ウェーブをやつてみた。一人ひとりの位置は変わらず、伸びたり縮んだりの上下動だけが輪を伝わる。つまり、波というのは物体が動くことではなく、振動が伝わることなのだ。波長や振幅についても高原先生が説明し、生徒は波を体感しながら学びを深めていく。



生徒たちが書いたボードをもとに「必要なことをメモしてください」と高原先生。ただ写すのではなく、メモは「理解したことを自分なりにまとめることが大事」と伝えている。

**個々の生徒ががんばるほど
全体の学びも深まる授業**

次の時間では、学んだことをもとに、用意されていた設問への答えを4人の班で小型のホワイトボードにまとめることになった。前の時間は個々の学習。人によつて抜け落ちがあるかもしれない。だから、学習目標を全員達成できるように、生徒同士で知恵を出し合つて確認するのだ。

「振動が『周期つてさ』などなど、おのが学んだことを思い出し、話し合つてボードに説明や図を書く。予習してきたことをその場で話す生徒もいた。「予習すれば余裕ができて授業が面白くなるぞ」と高原先生が常々言っているからだ。

制限時間が来て、各班がボードを黒板に貼り出した。どの班もしっかりとした書き込み。ただ、チャレンジ問題の最終設問だけはどの班も回答できなかった。

高原先生が率直な思いをぶつける。「僕、ここだと思う、君たちの課題はこの部分を誰も予習していなかったとは、思えないんだよ。でも、やっていたら悪いかな、と遠慮して言い出せなかったのなら残念。そこで前に出られるようになってほしい。じゃあ、必要なことをメモしてください。僕の説明よりも教科書よりも、みんながまとめたもののほうが絶対にわかりやすいから」

高原先生の物理の授業には、定番の型がない。生徒の意見や反応をそのつど取り入れ、毎時間、クラスごとに、授業の内容がどんどん変化するからだ。

■ 瀬谷高校(神奈川県立)



School Data

普通科/1974年創立
生徒数(2017年度) 945人(男子504人・女子441人)
進路状況(2016年度実績)
大学230人・短大17人・専門学校/各種学校30人
就職6人・その他27人
〒246-0011 神奈川県横浜市瀬谷区東野台29-1
TEL 045-301-6747
URL <http://www.seya-h.pen-kanagawa.ed.jp>

Outline

「より高い目標に向かって積極的に行動する生徒の育成」を目指す。四方に「瀬谷市民の森」が広がる恵まれた自然環境の中で、地域と連携した学校づくりを推進。地域団体と連携した学校周辺の清掃、地域の幼稚園や養護学校と連携した活動などに取り組んでいる。平成26年度に「地域等連携教育」研究推進校に。教育課程では部分的に選択制を取り入れ、生徒一人ひとりのニーズに応えた学習指導に力を入れている。



一段高いステージへ 生徒が目にする世界を広げたい

校長
岩崎彰夫先生

本校の生徒の多くは、まだ6~7割ぐらしか力を出していないように感じるんですね。だからこそ我々には「高校生をあなどらない」ことが求められていると思っています。いやいや、君たちの力はこんなもんじゃない。もっともつと力を発揮できるはずだ。そのことを我々が自覚し、生徒に本気で呼びかけていけるかどうか。

高原先生に感じるのはプロ意識の高さです。生徒と真正面からぶつかり、新しいことにどんどん挑み、うまくいかなければやり直して(笑)。そして授業に一生懸命に取り組む姿を見せているから、生徒もがんばろうという気持ちになるのだと思います。

言い続けることも大事ですよ。私自身、始業式や終業式や学年集会では「一段高いステージへ」とくり返しています。見える景色が違ってきて、進路の選択幅も君たちの世界も広がるから、と。

「初任は職業高校だったので、この子たちの熱はどこにあるの？」という感じで。必要なのはブレキじゃなくアクセ

授業ができるまで

ブレキ役をするつもりが必要なのはアクセルだった

教壇に立つ前、高原先生は「教員とはブレキ役」と思っていたそうだ。高校生というのは、体育祭や文化祭など何かに熱をあげると、勢いあまって暴走もするはず。それをなだめるようなイメージ。

ところが働き出してみると、現実の高校生の姿は、想像とは全然違っていった。

「初任は職業高校だったので、この子たちの熱はどこにあるの？」という感じで。必要なのはブレキじゃなくアクセ



1 個々の生徒の言動がこの場を創ることを何度でも何度でも強調する

授業で読み終えた人から着席するワークをしたら、ある生徒が「まわりが座ると焦る」と意見。やり方を修正すると、他の複数の生徒も「よかった」と。高原先生は「言ってくれた子がいたから変わった」と強調した。そのように、生徒のがんばりや勇気がこの場をより良くするのだとくり返し伝えている。

2 授業をより楽しむための予習と学びを自分のものにする復習を薦める

班学習では「私はしゃべれない」と弱気な生徒も。高原先生は「予習してきてみ？ 言えるかもよ」とまず投げかける。即興ではできなくても、予習すれば余裕をもって話したり聞いたりできる。予習は授業を面白がるための準備であり、そこで学んだことを深めてものにするのが復習だと伝えている。

3 生徒にアウトプットを求めることで個人およびチームの思考力を高める

高原先生は、「アウトプットする(書き出す・説明する等)」のが「考える」ことだと位置づけ、生徒にそれを求めている。言語化すれば考えが明確になるし、自分の考えをアウトプットして人の意見も聞くと、一人では気付けなかったことも発見し、チームの皆で考えを深めたり広げたりできるからだ。

4 他の先生の授業にアンテナを張り学習のつながりや多様性を生徒に示す

高原先生は、他の先生の授業をのぞき、雑談でも授業の話をしたうで「〇〇先生も考えてから話せというだろ？」など他教科の学習とのつながりを生徒に示唆。一方で、型がないのが高原流だが、「△△先生は型で考えるというだろ？ 両方やれば自分に合うのがわかる」と学習の多様性も伝えている。



ルだったのか、と衝撃を受けました」

2校目は進路多様校で、ここでは生徒が「熱を発散していました。出し方を間違えるな、という注意が必要でしたが」

3校目は中堅校で、またしても生徒から熱をあまり感じられない。4校目が今の瀬谷高校。こうした中堅校の生徒が「自分はこの程度」と自ら天井を決めてしま

い、ポテンシャルを発揮できずにいる、という傾向は年々強まっていると感じていた。「中堅校は生徒がおとなしく、教員も楽

だと言われることがあります。僕は、いいのかそれで、と思うんです。この子たちに「やればもっとできる」と感じさせたい。だから授業では、物理も学んでほしいけれど、それ以上に、勉強の仕方を身に付けてほしいと思っています。それも一人でやる勉強ではなく、団体戦で皆で力を高め合うような勉強の仕方を、です」

ばね状の玩具を使った実験。写真は横に揺らして横波を作ったもの。では縦波はどんなもの？ ばねの両側から波を送ったらどうなる？ 生徒たちは興味津々だった。



自分の授業の試行錯誤を、研修で学んだKP法(紙芝居プレゼンテーション)で伝えた高原先生。生徒からもアイデアを募集。

部活動で実感した チームの成長に必要なこと

「団体の勉強」を目指すうえでヒントになったものがある。前任校から注力してきた部活動だ。テニス部の顧問として部員と練習に励むなかで、ただ上手な子がいるよりも、実力はどうであれ勝利を目指す。最後までボールを追いかけられる子がいるほうが、チーム力が底上げされるのを実感した。目標に向かって率先してがんばるその姿に、まわりが感化されるからだ。

対戦チームの姿勢から学んだこともある。そのチームは一般校ながら、選手の手合を他の部員がそばで見守り、生徒同士でフィードバックまでし合っていたのだ。その代は歴代以上の大会成績を残した。

同じころ、高原先生はキャリア教育担当となり、さまざまな勉強会に参加、そのなかで組織やチームを機能させるリーダーシップの理論も学んだ。これがすぐく腑に落ちたという。皆で「目標の共有」をして「率先垂範」「同僚支援」。高原先生は、そうした場を、普段の授業でも生徒と一緒に創ることを目指した。

生徒はこう変わる

**周囲に助けられ励まされ
自分も人の力になろうとする**

高原先生の授業では、最後に生徒が振り返りシートを記入する。そして今回の授業の冒頭で、シートに記された生徒の意見や感想を高原先生がピックアップして紹介している。例えばこんなふうには

「『授業前に教科書を読んで、ハテナを意識して聞いたらハテナが少し消えた』そうです。予習して余裕があれば、自分が話すときも聞くときも違ってくるよな」

「『自分の意見もちつつ、相手の意見を聞くことができた』。これ、いいですよ。なんとなく聞く賛成も反対もなく、聞き流しちゃうから。自分でまず考えたいで、話を聞くということですね」

「『予習をちゃんとしたい』という頼もしいセリフもいっぱいありました」

「あと、ちゃんと聞いてくれて嬉しかったのだけど、僕は世界の人口を70兆と言ったらしいです。すみません。『70億だ』と訂正が入りました。すばらしい」

こうした意思表明を、生徒たちは4月からできたわけではない。むしろ最初はシンプルな意思表示すら苦手としていた。「1と思うならグー、2と思うならチョキ、3と思うならパーを挙げて。せーのー」と促しても、手を挙げるのはクラスで4、5人。めげずに「間違えていいんだ」と伝え続け、約1年かけて大半の生徒が挙手するようになったのだ。

そうして「何かを選ぶ」と「自分の意見も芽生えやすい」と高原先生は考える。三択からなんとなく選んだのでも、当たってほしいし、外れたら「違うの？」と小さなひっかかりが生まれるからだ。

「予習をちゃんとしたい」という頼もしいセリフもいっぱいありました。あと、ちゃんと聞いてくれて嬉しかったのだけど、僕は世界の人口を70兆と言ったらしいです。すみません。『70億だ』と訂正が入りました。すばらしい。こうした意思表明を、生徒たちは4月からできたわけではない。むしろ最初はシンプルな意思表示すら苦手としていた。「1と思うならグー、2と思うならチョキ、3と思うならパーを挙げて。せーのー」と促しても、手を挙げるのはクラスで4、5人。めげずに「間違えていいんだ」と伝え続け、約1年かけて大半の生徒が挙手するようになったのだ。



毎授業、最後の5分ほどで取り組む振り返りシート。「A：学習目標は達成できたか」「B：態度目標は達成できたか」「C：内容に関する質問・授業展開に関する意見・感想など」の3点を書く。AとBは①良くできた②まずまず③いまいちのどれかを選び、そのうえで具体情報を書き添える。

その記述に、高原先生は書いた箇所に下線を引いてハンコを押してリアクション（1クラス20～25分の作業量）。また、次の授業でピックアップしたものを共有している。なお、「〇〇ができなかった」と反省だけ書いた生徒には「→」マークを返す。「で、次からどうするんだよ？」という意味だと伝えている。振り返りは「反省ではなく、次への意欲を生み出すもの」と位置付けているからだ。

授業で生徒に意思表示を求め、振り返りシートを毎回書かせていくと、当初は単語しか書けなかった生徒の中にも、自分の考えを文章で表現できる子が増えた。

その内容については「本心ではなく僕に合わせているのかも」と高原先生は慎重な見方。それでも「言葉にするだけで引っぱられる部分がある」と思うし、この振り返りを通して「生徒たちが段々、僕への報告ではなく、自分と対話するようになった」という手ごたえを感じている。

生徒たちは授業をどう感じているのだろう。直接聞いてみると男子からも女子からも「やりやすい」という声があがった。その理由として、「間違えたことを言っても先生がフォローしてくれる」などと高原先生の心配りをあげた生徒がいた。

でもそれだけじゃない。無意識かもしれないが、このクラスや自分たちに対するちよつとした自信を、言葉の端々にのぞかせてくれた生徒も多かった。

「自分で考える時間が多いんです。ちょっと考えて、それから班で話し合いますか」
「わかつていなくても置いていかれないんです。班行動が毎回あるので」

「その分、自分たちでやってこないとやべえなあ、ってなるけれど」

「誰も予習してないと、班のみんながわからないことがあるから。班のボードをまっしろで出したらやばいので、最近はい自分の力ですけれど予習しています」

「発言しやすいです。授業の雰囲気が明るいから」

「あと、クラスの雰囲気がいいので」



授業で生徒に育みたい要素

	知識	能力	意欲・態度
育みたい要素	物理の基礎知識 ・自然の物理的な事象・現象に対する基本概念や原理法則を「理解」して「使える」ようにする ・例えば波について学ぶ単元なら、予習や授業の学習を通して、波に関する用語（振動・振幅・周期等）を「理解」し、それらの用語を班での話し合いやまとめに「使う」ことに挑む	リーダーシップ ・皆で共有した「全員達成」の目標に向かって、率先して動くこと（率先垂範）や、仲間に働きかけてサポートすること（同僚支援）に生徒が授業で挑戦し、そのスキルを高める 考える力＝アウトプットする力 ・生徒一人ひとりが自分の考えをもってアウトプットし、人の意見も聞いて考えをさらに深める	この場（授業）への当事者意識 ・自分の言動によって授業の雰囲気やクオリティが変わりうることを、生徒に体感させる 熱心な初心者としての態度 ・できないことやわからないことがあるときも、間違えてもいいから「やってみよう」「教えてほしい」と学ぼうとする姿勢を生徒に求める ・そうした言動を取った生徒をきちんと称える
それが今・将来にどう生きる？	自分の考えをもつ土台になる ・基礎知識があることで、連想したり新たな疑問が生まれたりと、自分の考えを形づくる 皆で学ぶときの発見が多くなる ・自分の考えをもっておくことで、ほかの人の話を見聞きしたときに、納得や共感、予想外なことへの驚き生まれ、学びが深まる	これからの組織で活躍できる ・変化が速い今は、一人の指示にまわりが従う組織より、誰もがリーダーシップを発揮して柔軟に対応する組織が志向されている。そうした組織で率先垂範・同僚支援して活躍できる チームで課題解決や創造ができる ・自分の意見を出し、周囲の意見も聞き、チームで課題解決やモノやコトの創造にあたる	チームやコミュニティの力になれる ・仮にスキルや経験はまだそんなになくても、できることがあることを自覚して動き、周囲の力になり、全体に貢献することができる 選べる未来が広がる ・進学や就職のほか何かに踏み出そうするとき、初心者となるような分野も選択肢に入れて、未来を思い描ける